

宇宙解釈の進化は許されない？——NHK への提言 (2)

Greatchain

2019/04/10

しつこいようだが重要なことなので念を押したい。「人間の起源など考えて生きている者はいないのだから、どうでもいいではないか」と、ごまかしてこの問題を一蹴するとしたら、それは大きな間違いである。まして教育に関わる者の言うべきことではない。たしかに普通は考えないだろう。しかし無意識のレベルでは、これほどしょっちゅう考えている問題はない。何のために生きているかを考え込んだとき、必ずこれが顔を出す。人は知能のいかんを問わず、人間を含めた宇宙そのものの、何らかの解釈を頭に置いている。

そこで、唯物論科学者という、世界で最も信頼されている人たちの教えるのは何か？ それは、世界は物質から始まり、そこから偶然、生命が生まれ、それが偶然、自然選択という力が働いて「進化」し、最後に人間が生まれたというシナリオである。それが支配しているのだから、人はそれが正しいのだろうと考える。これをよく考えてみれば、「人間の尊厳」などという考えが、間違いであることがよくわかる。そこで人はとりあえず落ち着く。たとえ気に入らなくても、それが科学ならと諦めるだろう。「優生学」という、自分に都合の悪い人間は処分していいという「科学」によって、気が楽になったのは、ヒトラー、スターリン、毛沢東であり、現在は、存在しないことになっている陰謀団が、これを最も重宝している。

これは困ったことではないか？ ではそもそも、人々が最も中立的で科学的だと考えてきた唯物論的世界解釈は、本当にそうなのか？ そして、神とか霊とかいうものを信ずる人たちは、宗教という特殊なものに縛られた、特殊な人たちなのか？ 超自然とは迷信という意味なのか？ 実は私も 50 年前までそう考えていた。汗顔の至りだが、無神論者が一番偉いと考えていた。しかし、世界全体が、だんだんそうは考えなくなってきた。実を言うと、「神」という言葉を使うのを、私は 20 年前までは、非常に恥ずかしく躊躇した。今はそうは思わなくなった。これはおそらく、他の人たちも同じではなかろうか？ そしてリフレッシュされた神という言葉を通じて、やっと本当の世界の構造がわかってきた。

恥ずかしくて、あるいは、それを言えば学者でなくなるので、「神」と言えない時代があった。「インテリジェント・デザイン」理論の構築者たちは、そういう時代環境に置かれ、その環境と戦わねばならなかった。あの馬鹿々々しい(ドーキングズの)ダーウィン進化論を批

判するためにも、理論が必要であり、それには敵の思考法を用いて証明しなければならなかった。その方法で抽出されてきたものは「インテリジェンス」であり、「神」は避けられた。馬鹿々々しいようだが、そこがポイントだった。あくまで旧来の思考の枠組みで、その旧来の理論（ダーウィン進化論）が、間違っていることを証明しなければならなかった。その点では特に、2009年のBook of the Yearに選ばれたStephen Meyerの*Signature in the Cell*を読んでみるべきである。Michael BeheのIrreducible Complexity(還元不能の複雑性)理論や、宇宙の驚くべき構造Cosmic Fine-Tuning(宇宙的微調整)の事実も、勉強しなければならない。今、彼らのおかげで、宇宙の有神論的仮説がいわば解禁となり、宇宙構造の仮説は飛躍的に発展した。

我々は、この悪意を向けられた思想体系を、無視すれば褒められるからと言って、無視すべきではない。ある時代が到来しなければわからないことがある。最近わかってきたことを、昔から知っていたように言うべきでもない。しかし、生物種が(いわゆる変種を除いて)他の種に徐々に進化することはなく、中間種というものがないことは、かなり前から知られていた。もうこれ以上時間をかけても、この結論は変わらない。そんなことはあり得ないと言うために、サスキンドの言うように、自然界に言うことを聞かせる「武器」を作るのは許されない。自分が折れて、考え方の前提を変えなければならない。ダーウィン進化論の代表的論客と言えば、リチャード・ドーキンスだが、その彼が、サスキンドと趣旨も乱暴さも同じ、このようなことを言っている：——

あり得なさという問題に対する答えとして、自然選択が最も有効であり…私はこの点を一つの寓話で表現した。山の一方の側は切り立った崖になっていて、昇ることは不可能だが、反対側は頂上までなだらかな斜面になっている。山頂には、眼や細菌の鞭毛モーターのような、複雑な仕組みが置かれている。そのような複雑性が突発的に、自分で組み立てられるという馬鹿げた考えは、崖のふもとから一回の跳躍で頂上まで飛び上がるといった、困難な行為に似ている。それに対して進化は、山の裏側に回って、ゆるやかな斜面を山頂まで這い上るのである。簡単だ！

ここで言っているのは、進化の飛躍という自然界の難問の解決は「簡単」で、裏側へ回ってなだらかな斜面を登ればいい、ということである。これを読む人は、ただただ目を回すばかりであろう。なだらかな坂道がないから困るというのに、それを利用すればよい、とはどういうことか？ 自然界には「量子飛躍」という現象があるが、こんなことはあってはならないことだ。それを解決するのは簡単で、それはなだらかだと言いくるめればよい——そう言っているようなものである。

学者がそういう言葉の遊戯をするのは、まあ許してもよい。しかし、そういう思想を子供た

ちに教え、彼らを教育するのは許せないことではないか！ それは、ごまかし、かつ押し付ける教育であるのみならず、ヒトラーや陰謀団を支持する教育でもある。ダーウィニストは、ダーウィン・フィンチの嘴が、環境によってわずかでも伸び縮みするなら、いつかはそれが伸びて、鶴になる可能性も、ないことはないだろうと言う。現在、世界の極左集団は、男女の区別は、人とサルとの区別のように、曖昧な「流動的なもの」だと主張し、それを積極的に子供に教えようとしている。これはNHKの根本思想でもあるようだ。

私は人を責めているだけではない。自分をも責めるべきことがある。私たち教員団は大学で、英語の入試問題として、ダーウィン進化論を内容とする問題を出したことがある。これに私自身は関わっていなかったが、当然、連帯責任を認めねばならない。大学の入試問題というものは、いつまでも強烈に記憶に残るものである。現在のメディアの中心階層にも、必ず何人かはこの入試を受けた方がおられるだろう。結果として私にも責任がある。先日訳したD・ウィルコックの談話にあったように、善人というものはどこにもいない。すべてが悪人だ。ただその悪人が目覚めねばならないということである。